

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム  
派遣研究報告書

2012年4月29日

派遣者氏名（専門分野）	太田晋介（フランス文学専修）
-------------	----------------

下記のとおり報告します。  
記

研究テーマ	フランシス・ポンジュの「美術批評」を巡って —40年代におけるポンジュ詩法に対する絵画の影響—
-------	--

派遣期間

2012年3月6日 ～2012年3月21日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問 研究 機関	フランス	パリ	フランス国立図書館（F・ミッテラン館、リシュリュール館一）	
	フランス	リヨン	リヨン第3大学	
	フランス	リヨン	リヨン高等師範学校	

派遣先で実施した研究内容

①ポンジュ戦後美術批評と画家との共同制作についての実証的な資料調査

デイドロ、ボードレール、ゾラなどに代表されるように、フランスには作家、詩人による美術批評・絵画言説の伝統が存在する。しかし、作家が絵画を語るとき一体何が語られているのだろうか？そもそも絵画を言葉で語ることは可能なのだろうか？現実の再現性・模倣性が美の基準であった19世紀までは、美術批評という視覚的要素の言葉による注釈・翻訳は、作家たちにとって決して不可能なことではなかった。しかし、ピカソやモンドリアンらの作品に見られるように、具象絵画から抽象絵画へ向けた転換が行われた20世紀において、現実の再現性という共通の貨幣を失った作家たちは絵画を言葉で語ることの困難を強く意識し始めたのである。その結果、現代作家が現代絵画について語ること、即ち同時代批評の系譜はフランス文学の領域から次第に途絶えてしまう。

そのような文脈の中、20世紀散文詩人フランシス・ポンジュ Francis Ponge(1899-1988)はブルトン、マルローといった同時代の作家とは異なる性格の美術批評を著した。同時代作家の多くが自己の芸術観、美学といった理論的枠組みの中に還元した上で、絵画を語る傾向にあったのに対して、自らの芸術観を表明しながらも、ポンジュは、画家とその作品という現実の批評の対象を常に顧慮しながら自己の美術批評を試みたのである。そのような批評活動を通して詩人は作家と画家の間に共有される創作に纏わる技法論・方法論を探求した。絵画と言葉の境界を徹底的に考察した彼の美術批評・絵画論は、文明論、ヴァレリーの提唱した〈制作学〉としての読解も許容する多相のテキストである。このようなポンジュの美術批評の今日性を明らかにすることを目的とし、派遣者は今日フランスでの実証的な資料調査を今回試みた。

ポンジュの美術批評について現地フランスにおける派遣者の具体的な調査内容は主に以下のものである。

まず、ポンジュが批評対象とした画家について、フランス国立図書館における資料調査を行った。ポンジュが批評を行った画家はピカソ、ブラックなど大画家もいれば、日本においては比較的名が知られていないE. ケルマデック(Kermadec, E. de)、J・エリオン(Héliou, J.)といった戦後フランス画家など多岐に渡る。今回の研究調査では40年代の詩人の美術批評で論じられるJ・フォートリエ(Fautrier, J.)、G・ブラック(Braque, G.)、J・デュブュッフェ(Dubuffet, J.)といった画家を中心に、日本では入手が難しい研究資料の内容の確認を行い、わけでも、画家と詩人の伝記的交流や、〈大戦〉という歴史的な文脈と画家の作品の相関関係に重点をおいた調査を行った。また、貴重図書として現地に保管されている、画家ブラックとの共同制作のもとで制作された小部数発行の詞華集を閲覧し、当時の詩人の絵画と文学に関する問題意識について、活字や余白の構成・配列といった文学テキストが持つ視覚的・絵画的要素との関わりについて分析した。さらに、フランス国立図書館リシュリュール分館では、詩人の美術批評の下書きや創作メモといった草稿資料及び雑誌発表原稿を参照し、生成的な側面からもポンジュの美術批評について検討した。

## ②ポンジュに関する国際学会に聴講者として参加

2012年3月15、16日にフランス、リヨンで開催されたポンジュについての国際コロックに参加し、現地フランスの最新のポンジュ研究の動向と成果の吸収に努めた。そこにおいて、複数のポンジュ専門家と意見を交わし合った結果、申請者の博士論文のテーマについて貴重な知見・示唆を賜り、今後の研究を続ける上で非常に有益な研究者間のネットワークを構築した。

## 研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

派遣計画申請書に記載した事項についてはおおむね当初の目的通り達成できた。とりわけ、派遣者の博士論文の中核に据えることを予定している、ジャン・フォートリエ、ジョルジュ・ブラックについては多くの一次文献が得られた。

フォートリエについては、派遣者があためてきた論理的仮説を裏付けるような、当時の思想史や画家と詩人にまつわる伝記的事実について多くの一次資料を採取できた。戦後当時のフランスにおいては、戦争とその犠牲者を描く画家たちが英雄視されたこと、フォートリエの美術批評と当時書かれたポンジュの他の作品の中には構成、詩法上の大きな相関関係が見られること、またポンジュのフォートリエの作品の受容においては〈宗教性〉が一貫して重要なテーマであり続けていたことが確認された。また、ブラックについては、画家についての多くの文献の所在を確認した。更に、ブラックを論じたポンジュの美術批評は膨大な精査すべき草稿資料が存在していることと、またマルクス思想と共産主義といった当時のポンジュの政治的な思想がそこには介在してくることを確認した。さらに詩人と画家の間で共同制作された詞華集を参照することで、研究において定本とされることの多いプレイヤード版のテキストが網羅しきれていない、ポンジュの詩の絵画的要素、テキストの空間配置といった要素の重要性を再認識した。大戦後のブラックの画風の変化と併せて、それらの事柄については今後更なる考察を試みたい。

ただし、画家2人に限定しても、フランス国立図書館に収められた全ての資料を網羅的に精査できたというわけではない。また大戦当時の絵画芸術におけるキュビズムの巨匠ピカソの影響力の強さを確認し、調査の必要性を実感した。今秋から予定しているフランス留学においてそれらの要素を補完することを予定している。

更にポンジュについての国際学会に参加することで、作家についての最新の研究の動向や知見を獲得できた。同時に、他の研究者の学術的な意識の高い研究発表を聴くことで、相対的な視点から自分の研究姿勢について反省する機会を持つことができた。加えて、学会の場では、著名なポンジュ研究者と意見を交換することで、今後の研究を続ける上で有益な人的ネットワークを形成することができた。

本派遣を通して、40年代のポンジュの同時代美術批評及び画家たちと行った〈共同制作〉が戦後ポンジュ詩学の発展に大きな影響を与えたことを確認した。さらに紙媒体や言葉の〈物質性〉*matérialité*を重視するポンジュの詩学と、戦後フランス画家たちの絵画の特徴の一つである絵具や画布の〈素材／媒質〉*medium*の強調の技法において影響関係が見出されることを確認した。更に、そのような詩学と絵画技法の一致の背景には〈大戦〉という特殊な時代状況が大きく作用しているのではないかと、という派遣開始以前より抱いていた仮説を実際に裏付ける資料の存在を確認することができた。今後、ピカソ、ジャコメッティなど巨匠を論じたポンジュの作品とその時代背景、さらにはレリス、ポーランといった同時代美術批評との間テキスト性など実証的な事柄に留意しながら、上記の問題についてさらに考察を深めたい。

## 派遣後の研究発表の予定

2013年発行の大阪大学フランス文学研究会が発刊している機関誌、*Gallia* ガリアに本発表で得られた知見を生かした論文を投稿する予定である。また、学外の研究会や学会、研究雑誌においても本派遣で得られた成果を順次発表していく予定である。